



## 病院経営とパリアン (14)

医療法人社団パリアン理事長  
川越 厚

### 病院再建のために具体的に行ったこと

#### 3. 緩和ケア病棟 (PCU) の開設〈後篇〉



##### 緩和ケア病棟 (PCU) の開設

PCU は聖路加病院の PCU と同一日、23 区内で 2(3)番目にオープンした。予算の制約があって、当初 11 床 (今の病床数の半分) でスタート。院内で初めての二交代制の看護体制を採用し、11 名の若い看護師が勤務することになった。一年後には病床数を 22 に増やしたのだが、さすがこの時には反対の声はなく、逆に職員からは増床を急かされるほどであった。

PCU の開設は賛育会病院にとって、優秀な人材、特に不足していた看護師を賛育会病院へ引き寄せる力になったし、院内の看護、医療の質を高める上で大きな刺激にもなった。それよりも最大の効果は、賛育会病院の経営危機を脱出する糸口が見つかったことである。思い描いた夢がすべて実現した。

##### 夢の実現を支えてくれた“ひと”

PCU に対する私の思いには、特別熱いものがあった。理事会も私の夢を理解し、強力にバックアップしてくれた。ただし事業自体が新しいものであり、以前からいる職員にその責を果たしてもらうには、あまりにも荷が重かった。外部の力を導入するのが、最善の方法であった。さいわい、私の思いに賛同し、賛育会病院へわざわざ就職してくれた人たちが少なからずいた。

PCU が賛育会病院にとってなぜ必要か、と言う私の話にじっと耳を傾けてくれた管理職のスタッフ達。PCU 開設にあたり、ホスピスケアに関する造詣が深いスタッフもいて心強かった。

病棟がオープンした時の PCU 責任者の医師や看護主任。二人とも私の夢に共感し、賛育会病院へ就職してくれた人である。

PCU の医師はもともと精神科医だが内科診療にも積極的に取り組んでくれ、賛育会病院の危機 (後に詳述) を救ってくれた功労者の一人である。年齢も 30 歳代前半と若く、彼自身ホスピスケアに携わった経験はなかったが、医師として実力がある上に「院長を支えたい」、と言う気持ちが人一倍

強かったので、私は躊躇することなく彼を PCU の責任者に抜擢した。ただし、任命にあたり、私は次のような注文を彼につけた。

「死に逝く人のケアは、看護師が中心にならなければいけない。君にお願いしたいことは、彼らが働きやすくなるように、医師の立場からできるだけの支援することです。あとは君に任せるから。」

私の言葉の真意を理解してくれた彼は看護主任とともに、素晴らしい病棟を作り上げた。

その看護主任はケアの中心を担う、看護師のリーダー役。

「賛育会病院に、理想のホスピスを作りたいのです。力を貸してくれませんか?」

夜勤明けにもかかわらず講演会場に駆けつけてくれた彼女に向かって講演終了後、私は彼女に向かってこのような誘いをした。

私の夢に共感した彼女は、翌年、賛育会病院へ就職した。看護師としての実力、緩和ケアに対する情熱を認め

つつも、あまりに年若い (確か 20 代の半ばだったと思う) ため、「緩和ケア病棟の責任者に」という私の

考えに、看護部長はなかなか頷いてくれなかった。結局、看護主任と言う形で PCU の看護責任者になってもらったが、PCU 開設において彼女が果たした役割は、どれだけ評価してもし過ぎることはないと思う。

彼女よりもさらに年若いスタッフをうまく取りまとめ、院内の他部署との調整を行い (特殊な病棟なので、院内からは特別な目で見られていた)、彼女は PCU の医師と協力し合って、すばらしいチームを作り上げ、質の高いケアを患者さんと家族に提供した。 < 2 ページへ >



< 1 ページより >

## 希望を天の星につなげよ

### (Hitch Your Wagon to a Star)

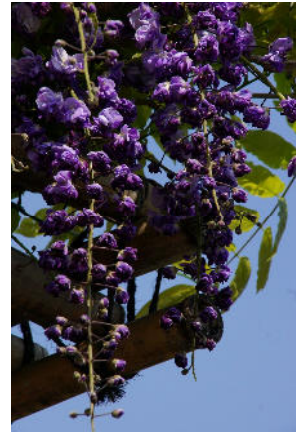
これは私の好きなエマーソン (R.W.Emerson、1803-1882) の有名なエッセイの一節だ。

「賛育会病院に理想のホスピスを作る」という希望。これは私が先頭に立って引いた荷車と言えるだろう。それを空の星に繋ぐというのだから、とてつもない夢だった。しかしその希望と夢をかかげたからこそ多くの人の心が動き、不可能を可能にすることができたのだと思う。

パリアンも大きな希望を積んだ荷車。素晴らし

い仲間が多数集まり、前から後ろから横から、その車を押してくれる。共通の希望、夢を持ち続けたからこそ、志を高く掲げながら、天の星に向かって共に歩み続けることができた。

69歳の誕生日を迎えた今日 (2016年5月11日)、職員が歌ってくれた誕生のお祝いの歌を聴きながら、その幸せをかみしめた。



## 事務 八木 梢

出身地：埼玉県 趣味：読書、旅行

パリアンに入職してから早や半年が過ぎようとしています。最初は電話をとる時に緊張して早口になってしまったり、メモを取り仕事を覚えるのに必死で、なかなか周りの様子に気を配るのも難しかったりなど、数か月経つのがアツという間でした。まだまだ覚えることがたくさんありますが、入職したて頃よりは成長できているのでしょうか。

パリアンでは医師、看護師を始め、様々なスタッフが、患者様、ご家族と関わっています。私が直接的に関わることはあまりありませんが、縁の下の力持ちとして、パリアンの一員として頑張っていきたいと思えます。

## スタッフ紹介 (入職順)



## 看護師 相良由紀子

出身地：神奈川県 趣味：旅行、ドライブ、写真撮影(風景)

20歳で看護師として働き始めて、気が付けば15年以上…大学病院から始まって、緩和ケア病棟や沖縄の民間病院、がん専門の病院での勤務を経て、4月からパリアンへやって来ました。

病院で働いていると「出来ることなら家に帰りたい」という気持ちを話して下さる患者さんがとても多いのですが、様々な事情からそれが実現できる方が少なかったのが実情…なので、今度は迎える側に立って、患者さんが自宅でご家族をはじめとした大切な方々と笑顔で良い時間を過ごせるよう、諸先輩方の姿を見て学びながら、お手伝い出来るようになれればと思っています。どうぞよろしくお願い致します!



## 看護師 奥田雪乃

出身地：埼玉県 趣味：シュノーケリング

私が訪問看護に出会ったのは、中学生の時でした。自宅で療養していた祖母が訪問看護を受けることになったのです。体調が悪い時でも、「先生や看護師さんが来ると元気になる」という祖母の言葉に、漠然と“医者や看護師ってすごいんだな”と感じていた記憶があります。

看護師としてまだまだ学ぶことばかりの毎日ですが、あの頃祖母や私たち家族にたくさんの力をくれた訪問看護師に少しでも近づけるよう、そして皆様に安心を提供できるようがんばりますので、宜しくお願い致します。



## 医師 田伏弘行

出身地：和歌山県 趣味：旅行、ドライブ

皆さん、こんにちは。5月よりパリアンに赴任しました田伏弘行です。

私は緩和ケア医を志して医学部に入り、研修医終了後はまず医師としての経験を積むために出身地である和歌山医大の消化器内科に所属し、大学病院や和歌山県内の一般病院で勤務していました。その後は抗癌剤治療の勉強をするために静岡がんセンターで2年間研修し、また和歌山医大に戻り消化器がんの抗癌剤治療と緩和ケアに従事していました。

抗癌剤治療は非常にきつい治療で、身体的・精神的・社会的に大きな負担があります。そのため私の抗癌剤外来は雑談や思い出話を積極的に取り入れた診療を心掛け、笑いを交えた外来を行っていました。非常に充実した診療でしたが、この間も緩和ケアへの想いが変わることはなかったため、前職場を辞してパリアンで在宅ホスピスケアを研修することになりました。

パリアンでは厚先生にご指導頂くだけでなく、博美先生以下の看護師のみなさん、事務員/ヘルパー/ケアマネ/ボランティアさんのそれぞれの役割も見せて頂き、いずれは地元和歌山でパリアンをモデルとした在宅ホスピスクリニックを立ち上げたいと考えています。

未熟な私ですが、どうぞよろしくお願い致します。



## ボランティアの集いの講義「こころのケア」 講師:横田喜久恵さん

ここパリアンにおいて約7年間「こころのケア」担当ナースとしてお世話になりました。



ボランティアの集いで「こころのケア」を講義する横田さん(写真左端)

人は人生の危機に直面した時、生きる意味や目的を自己の内面に新たに見つけ出そうとスピリチュアルな葛藤をするものです。私は、がん末期の患者さんやご家族と向き合う時には、傾聴する側として自己の生き方や死生観をしっかりと持ったうえで、患者さんやご家族のこころを受け止め、生きる意味や目的を見出すことの手助けをすることを大切にしてきました。

ときには、患者さんから「あの世があると思いますか?」と聞かれることもあります。そんな時、肯定することもあります。安易なアドバイスはしな

いよう心がけました。又、「もう死にたいのです」と語られたとき「そんなこと言わないで」とか「こんなに食事をして頑張っているんじゃないですか」というような励ましは、患者さんにとって危険な言葉となることもあります。

大切なのは、まず良く聴くことで、患者さんの表情や言葉から本当の思いは何なのかを、患者さんに寄り添い共感したうえで、読み取っていくことです。

“共感する”ということとは“可哀そう”という同情や“私も同じ気持ち”という同意ではなく、対話の中から相手の感情をくみ取り、相手の思いを言葉に表現できるところまで理解することだと思えます。

在宅ホスピスケアにおいては、命を支えることはもちろんですが、その人の生活を丸ごとサポートすることと捉えると、様々な職種の方々としてしっかりチームを組んで、個々の対象者に向かい合うことが重要だと思います。

## 緑的那須で、職員らに話したこと パリアン研修旅行から

雨上がりの那須は霧で視界こそ十分開けていなかったが、つつじは赤く一面に園を染め、青緑の若葉が散策する私たちに生きる力を与えてくれた。5月27、28日のパリアン一泊研修。総勢16名が集った。研修テーマは、「わたし達が関わる患者とその家族とはどんな人なのか」ということ。患者や家族はどんなことで苦しみ、どんな関わり方を私たちはすればよいのか。「相談外来」での患者・家族との真剣勝負を紹介しながら、同時にパリアンの働きをも参加者に知ってもらった。

「どうして、パリアンの患者さんはみな穏やかに亡くなっていくのかよくわからなかったが、今日の話聞いてとてもよくわかった。」ボランティアさ

んの感想だった。職員やボランティアに、もっとも私たちの働きを知ってもらわなければいけない、と反省した次第。まじめな会の後は、いつものように緊迫感あふれるリズムゲーム。終了は23時だった。(KK記)



相談外来の話に熱が入る厚先生と真剣に聞き入るスタッフ

## ボランティア紹介

### 第3回 手作りボランティア

ボランティア5人がメモルの集いでの贈り物、暑中見舞いやクリスマスプレゼント、メモリアルツリー、姉妹ホスピスへの贈り物、ボランティア基金のための作品を作ったり、医療器具のカバーなども製作している。ひと針ひと針心をこめて手縫いで作りあげた贈り物を受け取った患者さんから、「手の込んだプレゼントをありがとう」とか「毎年ありがとう。感謝して飾っています」などの感謝の言葉をいただいている。



手作りボランティア作業風景(写真左)と手作り作品(同右)

5月14日のパリアン講演会では手作りの品を販売し、今後は暑中見舞いの贈り物の製作にとりかかる。ボランティア5人はとても忙しく活動しており、自宅へ持ち帰って作品製作することもしばしばとか。でも5人のボランティアは、“患者さんが喜んでくださるなら”と張り切って活動している。

## 第4回パリアン公開講演会開催される

ボランティアグループ・パリアン主催の第4回パリアン公開講演会「家で最期を過ごすために」が一般来場者100名を迎え平成28年5月14日、本所地域プラザBIG SHIP4階多目的ホールで開催された。

### 第1部「家で看取った25年の経験から」講演：パリアン理事長・川越厚先生



第4回パリアン公開講演会模様

川越先生は自らがんに罹ったことを契機に在宅ホスピス医となったが、末期がん患者さんが家で最期を過ごすために必要な知識と心構えについて、在宅ホスピスケアの経験をもとにスライドやTV番組を使って講演した。

在宅医療を始めた時は、病院の最先端医療を家でやればいいのかという考えだったが、ある乳がんの方が自宅で亡くなる様子をご主人から聞いて、病院医療を家でやるのが在宅医療ではないことに気づかされたという。

在宅医療は制度的にも変革していった。1992年に医療法が変わって、家でも医療が受けられることになり、がん患者が家で過ごすための生活上の必要な支援は2000年に始まった介護保険制度によって、国は在宅医療に向かって加速した。患者や家族は「まだまだ病院に行ったら何とかしてくれる」という意識が強いが、病院は治すことができなくなると、緩和ケアや在宅に行くようにと変わってきた。

末期がん患者の特徴は ①年齢が比較的若い ②残された時間が非常に短い ③最期まで元気でいられる ④痛み、息苦しさはつきものなので、症状緩和には緩和ケアの専門医、専門診療所にかかることが大事である。

在宅ホスピスケアの考え方は、①患者さんへの日常生活を支える ②できる限り医療は行わないで、自然の経過を見守る ③患者さんの苦しみや不安、それを見守るご家族の辛さを緩和するという事に意を注ぐことだそう。

その在宅ホスピスケアを支えるケアチームの中心になるのが看護師であり、ホスピスケアにとっては看護師の働きがとても大事だ。また、医療者は患者宅に常時いないけれど、24時間体制でいつでも連絡がとれるようにすることは、医療者と患者さん・ご家族との信頼関係を維持するためにも、在宅ホスピスケアで一番大事なことである。

本当に家がいいのかという問いに対して、アメリカの研究では、在宅ケアの専門チームが関わった場合は、患者・家族の満足度は最も高いという。また、東北大の研究では、緩和ケア病棟で亡くなった場合と家で亡くなった場合の家族（遺族）の満足度はほぼ同じであったという。在宅死の満足度が高いのは、自分達で納得のいく死を創り出すからで、最期をどう迎えるのかという決断ができるように事前に十分に話し合い、患者本人とご家族の意思を実現するからではないかと川越先生は考えている。

最後に「我々がやっている医療はどういうものなのか。人は自分がまもなく死を迎える時になっても、命、家族、会社、医療などというなかなか断ち切れない鎖に繋がれており、その鎖をはずせないでいる。それをうまくはらずすお手伝いが我々の医療だと思う」とまとめられた。(IE)

## 看護師、薬剤師、ケアマネ、ヘルパー、ボランティアがチームでの役割を紹介

### 第2部「在宅ホスピスケアを支えるチーム」を講演

パリアンの看護師、ケアマネジャー、ヘルパー、ボランティア、連携している薬局の薬剤師の皆さんが、それぞれの立場から在宅ホスピスを支えるチームでの役割について話した。

訪問看護師は、患者さん・ご家族が願っている自宅で日常の暮らしが続けられるように、痛みや苦しさを緩和する看護の提供が主な仕事だが、医療と福祉の橋渡し、他職種の皆さんと協働して、在宅ケアチームをまとめることも訪問看護師の大事な役割だと話していた。

薬剤師さんは、薬を自宅まで届けるだけではなく、患者さんとコミュニケーションをとり、医療者や介護職の方々と情報交換して、在宅ケアを意識した活動をしているという。

ケアマネジャーさんは、介護が必要になった時に自宅で担当者会議を開き、患者さんの情報を共有して、チームとしての介護体制を整える。自宅で最期を過ごすためには、早めの準備が大事だという。

ヘルパーさんは、介護保険を利用した生活支援や身体介護を提供している。訪問介護は他人が頻繁に自宅に入ることになるので、利用者が負担を感じないよう心がけ、平穏な日常生活が送れるよう配慮しつつ訪問していると語った。

ボランティアの方は、専門職とは違う視点で患者さんやご家族が少しでもほっとでき、暖かい心の交流がもてるように努めていて、患者さんとの関わりを通じて貴重な学びをさせていただいていると話していた。

最後に講演会に参加してくださった病院のがん相談支援センターの方や地域包括支援センターの方からも、がん患者の支援についてお話しいただき、多くの人が支えているケアなのだということを、皆様に実感していただけたようだ。



## 「遺族と語り合い分かち合う会」を開催

パリアンの遺族ケアの一つとして、1年目の遺族を招待して故人を偲ぶ会「メモルの集い」を開いているが、これとは別に「遺族と語り合い分かち合う会」が4月26日、看護師、ボランティアが協力して開催され、3名のご遺族が参加してくださいました。

主催した遺族ケア担当の看護師は、看護師が気にかけていた遺族や死後の心のケアが十分でないと考えた遺族のフォロー、家族を亡くされてまだ間もないが故人の話をしたという声が強かったため、この会を開催することにしたそうだ。

今後は既存のメモルの集いとの関連を考えながら、どういう方をフォローしたらよいかを検討

の上、この会を開催していくという。

出席したボランティアは「ある方は、共に過ごした日々を感謝しながら過ごしておられると静かに話してくださいました。また、ある方は、パリアンに出会う前の、患者と共に苦しんだ闘病生活を切々と語られました。ご家族は、一緒に見送ってくれたパリアンのスタッフが、その後もこうして気遣ってくれることに力づけられたのではないのでしょうか。安心して今の思いを語っておられる様子が印象的でした。私たちボランティアもこの会を通して、ご遺族のその時々に応じた、寄り添うケアの大切さを教えていただきました」との感想だった。

## パリアン・スタッフの講演予定(確定分)

講演者	開催日	講演会等	演 題	会 場
川越厚	7/3	全国在宅療養支援診療所連絡会第4回全国大会ランチョンセミナー	「在宅緩和ケアにおけるモルヒネ持続皮下注射」	愛知県産業労働センター ウィンクあいち (名古屋市)
川越厚	7/6	地域包括ケア推進三市合同研究会	「在宅で最期まで支えていくために医療と介護の連携と家族支援」	武蔵野スイングホール (武蔵野市)
川越厚	7/17	日本キリスト教団西中国教区信徒大会	「老いと死のめぐみ」	山口市
川越厚 川越博美	7/30	にいがた発！在宅ホスピスケアボランティア講座普及・啓発セミナー	「在宅ホスピスとは～ひとり暮らし、明日はわが身・死の前後におきる不思議な出来事(在宅医として)」 「在宅で“生きる”を支える(看護師として)」	県立生涯学習センター大ホール (新潟市)

パリアンのフェイスブック (<https://www.facebook.com/hospice.pallium>) でも講演予定を随時ご紹介しています。

## 6月のボランティア活動予定

- ・ボランティア入門講座：6月4日(土) 午前10時～午後4時
- ・訪問ボランティア：(訪問ミーティング) 6月10日(金) 午後3時～
- ・サロン・ド・パリアン：6月3日、10日、17日、24日
- ・命日カードボランティア：6月16日(木) 午前10時～
- ・手作りボランティア：6月6日(月) 午後1時～
- ・事務ボランティア：6月18日(土) 午後1時～



6月の花(芝田さん提供)

## 編集後記

ボランティア主催の公開講演会が5月14日、墨田区の地域プラザ BIG SHIP で開催され、予定していた100人の一般来場者を迎え、講演会は成功した。これはボランティアの皆の自主的、積極的な活動によるところが大きい◆ボランティアは当日開演1時間半前に集合して任務分担を確認し、午後1時に持ち場に散った。受付は開場早々の来場者の対応に追われ、図書販売、手作り販売は販売品の展示を始めた。場外案内係は地下鉄出口などの場所に向かった。会場係は満席の座席に空席ができないよう到来場者を誘導していた。講演スライド係はマイクやスライド動作の事前チェックをして、開演を待った。講演会は、予定通り午後4時に終了した◆今回の運営での反省点も見つかった。「新しい会場で開催する時は、会場の構造や設備についてボランティアが事前に知っていれば、行動がスムーズにできたのではないか」「スタッフ全員が当日の詳しいタイムスケジュールを知ること、次の行動の準備ができたと思う」などの意見がボランティアから寄せられた。10月7日には第5回公開講演会があるので、この反省点を活かしていこう。(IE)